

第7章 中高生世代への対応

第1節 【問題意識】 中高生世代にとっての児童館

児童館では、中学生・高校生世代³⁰（以下、中高生世代）の支援も期待されている。長らく年長児童の支援はとかく後回しにされがちであった。自主的であり創造的な活動支援や、彼らの抱えている課題への寄り添い支援は、次代を担う若者を育むために必要不可欠なことである。

前章にもあるが、児童館の主な利用者層が小学生であるため、児童館職員が中高生世代の利用を積極的に検討してこなかった歴史もある。また、子どもの側からも「児童館＝小学生」というイメージがあり、心理的ハードルのため、利用につながらなかったことも想像される。

中高生世代は思春期にあたる。その発達課題は「自分が何者か、やりたいことは何か、社会の中での自分の位置づけなどについて、模索・葛藤する」とされている。多くの人と出会い、影響を受け、多様な経験のなかで失敗や試行錯誤ができる（許される）ことが大事になる。すなわち、活動スペースや利用時間が保障されるだけでなく、そこに自分を受け入れてくれる人がいるかどうか、中高生世代がその場を居場所として認識するかにつながる。

学校でもない、家でもない、第3の居場所（サードプレイス）が彼らには特に必要と言われる。それは、プレッシャーや葛藤との戦いではなく、自分らしさが発揮できることにより、自己形成につながっていくからである。

児童館は利用にあたっての自由度が高い。評価や競争があるわけでもない。そのため、彼らのサードプレイスになりうる潜在的な力があると考えられる。調布市は、全国的にも珍しい中高生世代特化型の児童館「青少年ステーション CAPS」を設置している。11の児童館との関係性についても検討することが求められる。

第2節 【現状1】 中高生世代の利用状況

市内の児童館では平成10年以降、徐々に中高生世代支援を展開してきた。

平成10年	4館（国領・深大寺・西部・緑ヶ丘）で午後7時までの開館時間延長の試行実施
平成12年	全館で午後6時までの開館時間延長の試行実施
平成15年	青少年ステーションCAPS開設

東京都内や全国でも徐々に児童館での中高生支援活動が認知され、ニーズが顕在化してきたあたりから、展開してきたと言える。

市の児童館を利用する中高生世代の児童は、登録する必要がなく、開館日・開館時間に来所し、自由に利用することができる。実際には、小学生の利用が多いことや、学校・部活などのスケジュールにより、夕方早くからは利用することが難しい。これは、利用者アンケートの中学生の放課後の過ごし方にも現れている。「放課後の過ごし方」(問3)の上位には、「部活動をしている」(71.1%)、「塾や習い事に行っている」(47.4%)が挙げられている。現在、CAPS以外の全ての児童館では、17～18時の間、中高生世代の利用を促すための専用時間を設けている。

利用内容としては、スポーツ（バスケットボール、卓球など）、ゲーム（カードゲームなど）、友達や職員と話す、などである。

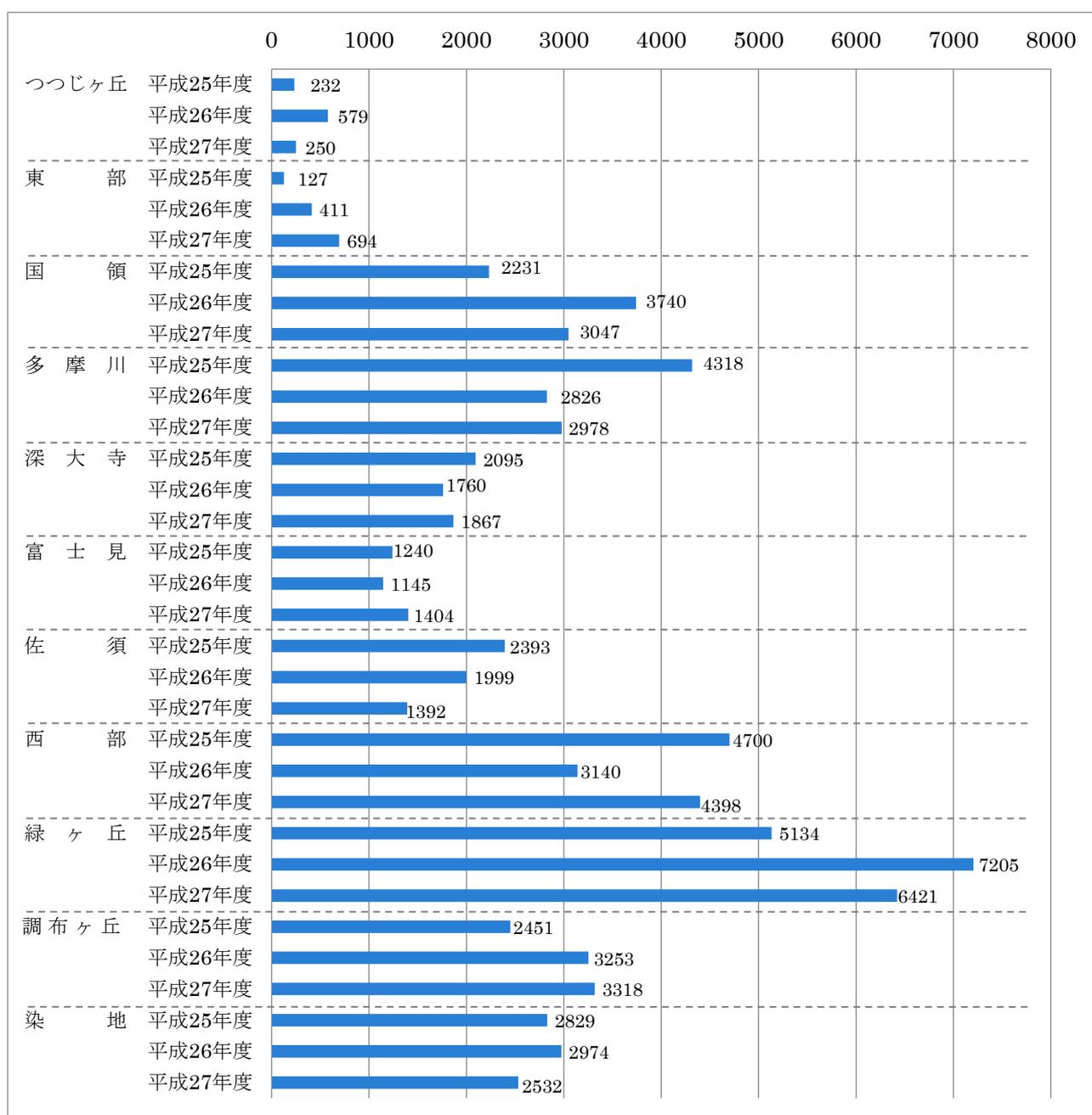
児童館メンバーズ（子ども実行委員会）は中学3年生までを対象としており、行事の企画段階から参画し、主体的に関わることもできる。

30) 児童福祉法の対象児は18歳未満である。高校に通わない児童もいるため、「世代」という用語を使用している。

児童館を利用しない中学生に「利用しない理由」（問7）を尋ねたところ、上位には「施設に魅力を感じないから」（43.1%）、「家から遠いから」（35.5%）、「児童館を知らないから」（25.8%）、「もっとおもしろいところがあるから」（24.0%）、「小学生が多いから」（21.4%）が挙げられた。物理的・心理的利用への壁があることがわかる。

児童館の中高生世代の利用状況（平成25～27年度）は次図のとおりである。施設によって大きく差があることがわかる。立地条件、設備に大きく影響していると思われる。特に利用の多い、緑ヶ丘児童館の地域は小学校1校、中学校1校を対象としていることもあり、小学校時代から継続して利用しているのではないかと想定される。また、同館では、中学生が地域で実施されているキャンプ活動などにも支援者として参加することにより、地域住民のなかにいるロールモデルと出会える機会も得ている。立地条件が功を奏しているという見方もできるが、児童館の関わりによっては他地域でも可能性がある。

単位(人)



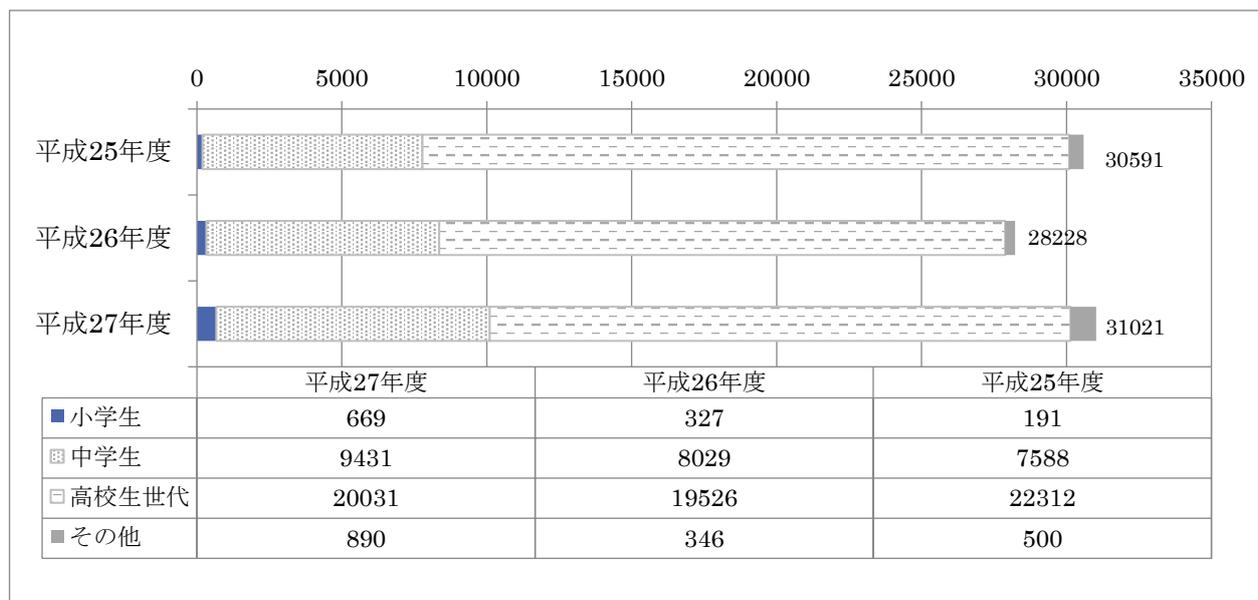
第3節 【現状2】青少年ステーションCAPSの取組

調布市青少年ステーションCAPS³¹は全国でも珍しい中学生・高校生世代をメインターゲットとした特化型児童館である。その概要は次表のとおりである。なお、設置場所・開館時間・休館日は、第2章参照のこと。

運営主体	特定非営利活動法人ちょうふこどもネット（業務委託）	
利用対象	主に中学生・高校生世代。市内の中学校・高等学校に在学中、または在住、在勤している人。18歳を迎えた年度末（3月31日）まで利用可能。ただし、高等学校在学中の場合は19歳の年度末まで。	
事業コンセプト	中・高校生世代に対して、健全な居場所を提供し、中・高校生世代が自分たちの創造性と主体性を確立し、さらに、その力を地域に還元し、地域での中・高校生世代への社会参加を活発にさせることで、すべての人がつながった街づくりを目指すことへの一助とする。	
主な事業	居場所づくり事業	中高生世代に対する健全な居場所づくり
	活場所づくり事業	音楽・ダンス・クラフト・スポーツ・IT・相談・学習・国際交流・支援スタッフ・広報・サークル・非行防止・地域交流・サブカルチャー 14種の事業／夏・冬・春の3大イベント、音楽ライブとダンスイベント、その他イベント・講座の実施
	生場所づくり事業	自主的運営サポート（イベントの実行委員会等）、地域でのボランティア活動

利用実績は次図のとおりである。高校生の利用が多いことがわかる。これは、CAPSが市の西部に位置しており、東部エリアの中学生からは利用が難しい状況にあることも関係している。

単位(人)



31) CAPS=Chofu Active Person's Station

利用内容は、他の児童館とほぼ同様で、スポーツ、ゲームなどが多い。特に、スポーツの中では、中学校の授業にダンスが取り入れられているので、その練習に来ることもある。開設当初と異なる利用としては、自主勉強の場としての利用である。学習意欲はあるが、塾などには通えないとか、学習につまずきを感じている生徒もいる。

CAPS による利用者アンケートで、施設への希望を尋ねたところ、ほとんどの子たちは「今のままでも構わない」と回答している。CAPS では、「安心安全で何も大人に干渉されず過ごせる所がほしい」というニーズに合致したと分析している。

小学生の利用については、ルールを設けていて、基本的には 11 ある児童館の利用を促している。それは過ごしやすさやプログラム内容の面からである。現状としては、4 月 1 日に中学生になった途端に、その子たちが多く来館している。

不登校や障害など、本人や家庭に課題を抱えるなど多様な子どもたちの居場所であるため、スタッフに臨床心理士を配置し、直接子どもに関わったり、スタッフの相談にのったりしている。

第 4 節 【課題分析】児童館での中高生世代支援の課題

利用実態が館によって大きく異なることもあり、また CAPS の特化した支援について比較検討することは難しい。しかしながら、CAPS の実践から見えてくる中高生世代の課題やニーズは全市的に共有されるべきものと考えられる。

福祉的な関わりとしての学習支援、命の大切さを知ることや切れ目のない支援体制づくりのための「乳幼児と中高生のふれあい交流事業」、いじめ・ひきこもり・友人関係のトラブル・受験や進路等の悩みなど不安定な心理面への配慮や相談支援などを通して、児童館が中高生世代の成長を支えていく必要性は高い。

CAPS を除く、11 の児童館の課題としては、

①ハード面（物理的スペース、開館時間）、ソフト面（中高生が楽しめる行事や活動）の両面からみても、現状では中高生世代を受け入れることが不十分。

②職員側の課題として、苦手意識やスキル不足がある。また中高生世代のロールモデルとなるような学生等の確保ができていない。

③職員を支える仕組みの欠如。中高生世代特有の課題を解決する仕組みや相談相手の不足、CAPS との連携不足。

④居場所（サードプレイス）について、地域社会や学校などの理解不足。
などが挙げられる。

第 5 節 中高生世代のための児童館の将来像に求められる機能・役割

中高生世代に対しての児童館の必要性や展開されるべき事業、求められる機能・役割について議論をおこなった。

< 青少年ステーション CAPS の利活用状況、事業内容は好評価である。 >

全国的にも珍しい中高生世代特化型児童館として、その運営は手探りなものから安定的なものへと変わった。今後はますます他機関との連携により、特化型の強みを生かし、存在感を増して欲しいと考える。

<市東部地域に同様の施設（機能）が求められている。>

CAPS が市西部地域に位置していることから、特に東部地域に在住する中学生は利用までのハードルが高い。CAPS と全く同じような施設を検討することも1つだが、既存の児童館に機能を付加していくことも案としてあげられる。

<課題を抱えている子どもも含めた「居場所」「寄り添い」機能が求められている。>

高校を選択しない子どもたちや、高校をドロップアウトしてしまった子どもたちもいるのではないかと。そのため、中高生「世代」と表現している。子ども・若者支援施策との連動で支援することも重要であるし、CAPS や児童館を身近な居場所として選択してもらえるような周知も必要である。

<全ての児童館で中高生対応に特化することは難しいのではないかと、特化型の館などを設けるのはどうか。>

CAPS のような施設を新たに設置することは現状として難しい。また、現状の職員体制や職員個人が有している資質からも全館が中高生対応に求められる役割を發揮することも難しい状況があるのではないかと。そうした中で機能を特化した「特化型館」などを複数設定するのはどうか。

ただし、基本は0～18歳の切れ目ない支援が重要である。CAPS や特化型館以外の児童館でも、中高生世代が利用できないということのないような配慮を望む。

<CAPS と児童館の連携の促進を期待する。>

CAPS が蓄積したノウハウを市内児童館に還元することにより、全市的な支援体制を構築することができるのではないかと。今後一層の連携を期待する。

<中高生世代に積極的に関わるボランティアが期待される。>

中高生世代に関わるのは職員だけではないほうが良い場合もある。市内に在住・在学の学生等の若い世代に関わってもらい、ロールモデルを見せていく必要性もある。

<次代の親を育成する、あるいは若年の妊娠等も想定される中、命のふれあい（乳幼児と中高生世代の交流）などを行うことが期待される。>

中高生世代は次の親である。近年、若年の妊娠等により、痛ましい事件や児童虐待が報じられることもある。調布の児童館・CAPS を利用した子どもたちがそのような加害者になることのないよう、命を実感できる取組を推進してもらいたい。これが、切れ目のない支援のゴールでもあり、スタートでもある。

これらから、中学生・高校生世代に対する児童館に求められる機能・役割としては、以下の5点に整理した。

- 自宅，学校以外の第3の居場所（サードプレイス）
- 中高生世代の遊び，自主的な活動の支援
- 課題を抱えた子ども・家庭に対する支援
- 市民の参加・連携による事業推進
- 次代の親育て

また，そのために必要な「地域・関係機関との関わり」「職員の資質」「情報発信力」「施設・設備」について次図のようにまとめた。

「中高生世代のための児童館の将来像」に求められる機能・役割

児童館に求められる機能・役割

- 自宅、学校以外の第3の居場所（サードプレイス）
- 中高生世代の遊び、自主的な活動の支援
- 課題を抱えた子ども・家庭に対する支援
- 市民の参加・連携による事業推進
- 次代の親育て

そのために必要な・・・

地域・関係機関との関わり

- 中高生世代の活動に対する理解促進（地域行事への参加や活動状況の周知広報）
- 行事や通常活動において近隣地域で活動する児童館支援者の募集及び活用
- 地域のネットワークや要保護児童対策地域協議会などへの積極的な関与により、課題のある子ども・家庭への支援

職員の資質

- 中高生世代が自立した社会人になるための時期として、意識した対応ができる職員
- 中高生世代の遊びや活動に対して助言できる職員
- 中高生世代からの相談に対応できる職員
- 中高生世代の子育てに関する相談に対応できる職員
- 地域住民の参加・連携を得て、豊かな事業づくりができる職員

情報発信力

- 中高生世代向けイベントに関して、市ホームページで情報発信するとともに、おたより（通信）を発行して広く情報を提供
- 中高生世代が利用しているSNSの活用を図る
- 児童館における中高生世代の活動や声を発信する
- 切れ目のない支援を展開する児童館の存在意義（乳幼児期から中高生世代を橋渡ししていく）を周知広報

施設・設備

- 様々な活動を展開できる施設・設備の確保
- 特化した施設について検討する（青少年ステーション CAPS に類似した専用館、あるいは既存児童館のなかで機能を特化した特化型館を検討し、CAPS と連携する）
- 中高生世代が利用しやすい開館時間の検討